

株式会社伊予銀行から 防災倉庫が寄贈されました

株式会社伊予銀行から防災倉庫7台が寄贈されることになり昨年12月21日に、十河嘉彦常務取締役（写真左）から渡部助役に目録が手渡されました。

寄贈された倉庫は、地域防災力の向上を図るため、市内全域の防災拠点となる公民館などを選定し設置する予定です。



社団法人愛媛県建設業協会西条支部と西条市が 災害時における応急対策業務に関する協定を締結



▲協定書に調印する社団法人愛媛県建設業協会西条支部の星加隆夫支部長（左）と伊藤市長（右）。

社団法人愛媛県建設業協会西条支部と西条市との間で「災害時における応急対策業務に関する協定」を締結することとなり、昨年12月21日に市庁舎で調印式が開催されました。

この協定は、地震や風水害などによる災害が市内で発生または発生しようとしている場合に、相互が協力して応急対策業務・災害予防措置に当たろうとするものです。

主な実施業務は、道路上の崩土・河川の流木・堆積土砂等の障害物の除去や、浸水・がけ崩れ等の応急対策、公共土木施設等の機能の確保などで、災害の拡大防止に必要な応急復旧業務を速やかに行うものです。

四国鉄道文化館 (仮称)

外壁に映える職人の“鏝”さばき！

左官職人 山田泰さん（朔日市）



建築こぼれ話 ㊦



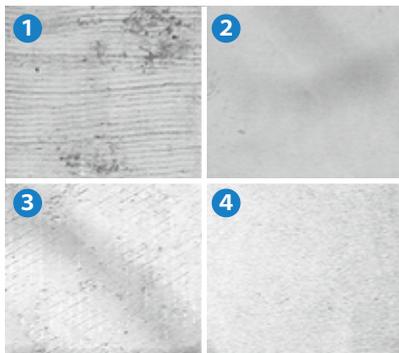
▲土佐生漆喰の試し塗り作業を行う山田さん。

西条産の木材を調達し、古くから伝わる社寺建築の技を駆使した大工の工程に入ります。ここでも伝統の匠の技が活かされます。

左官工事は山田泰さん（64歳）が担当します。山田さんは、市内ではほとんど使われなくなった「土佐生漆喰（しつくい）ヨロイ壁」という手法で鉄道文化館の外壁を仕上げようと考えています。

この手法はその名の通り高知県に伝わる工法で、一般的な漆喰に比べて壁強度が高く、ミルキーホワイトの色をした独特の光沢が目に見え、いといわれています。台風直撃を受けやすい安芸や室戸に多く見られるそうです。

海藻の代わりに稲わらのスサを発酵させ、これを石灰と練り合わせることで強さや美しさ、温もりが得ら



▲土佐生漆喰ヨロイ壁の工程

- ①「下地」②「下塗り」③「中塗り」
- ④「上塗り」

れます。また、職人の鏝（こて）さばきで、さらに強く、美しくなっています。

漆喰壁自体が新建材の便利さに押されて減少しつつありますが、特に調湿効果に優れた「土佐漆喰」という自然素材で仕上げる鉄道文化館の外壁は、四季のある日本に最も適しているといえます。

「この工法は、下塗り、中塗り、上塗り、大変手間のかかる仕事だが、やりがいがある。百年以上もつような壁に仕上げたい。この壁と一緒に、この技術も次の世代へ引き継ぎたい」と語る山田さんは、おじいさんから続く三代目の左官職人。

「後継者は？」という問いに、「娘婿が修行中で…」と、うれしそうに目を細められました。